

～唐津城石垣再築整備事業に伴う文化財調査～

「唐津城跡」本丸文化財調査 現地説明会 平成23年6月26日(日)

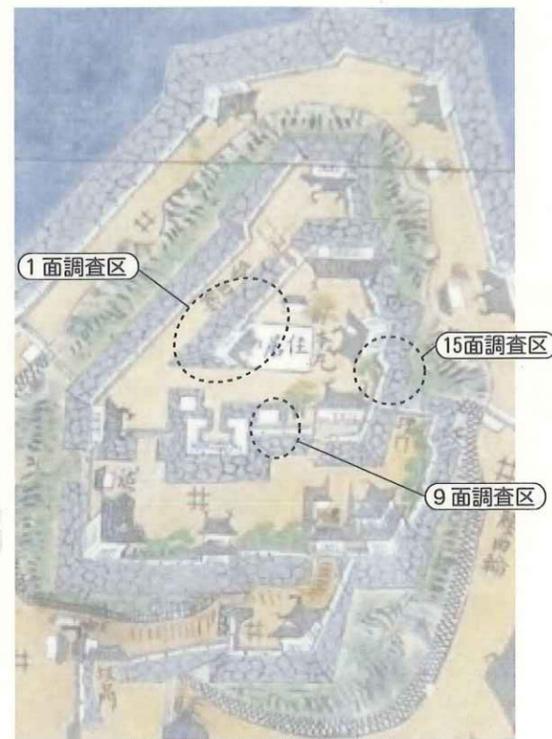
★文化財調査成果のポイント★

- ①度重なる石垣修復の様子
1～3面石垣では、江戸時代に行われた石垣修復の跡を確認しました。石垣修復は、江戸時代を通して最低でも6回にわたっており、その主な原因は石垣が崩壊したためと考えられます。
- ②石垣の崩壊や変形を物語る石組溝
2面石垣の裾まわりで、板状の石材を組み合わせた側溝を検出しました。この石組溝は、波打つように変形した状態で見つかりました。石垣の孕みによる押し出しや、部分的な地盤の沈下の影響がそのまま石組溝に伝わり、溝が波打つように変形するという特異な状態になっています。
- ③地鎮の痕跡を発見
江戸時代の初め頃と考えられる3回目の石垣修復時の盛土から、2枚の京都系土師器皿が合わせ口となって、水平に据えられた状態が見つかりました。2枚の皿の内面には、墨でまじないの文字や記号が書かれています。これは江戸時代の石垣修復時に行われた地鎮の跡と考えられます。このようなまじないの作法にのっとり、文字や記号を記した土師器皿を埋めた地鎮の痕跡は、県内で初めて確認されました。

○調査に至る経緯○

唐津城の石垣は築城されてから400年が経過し、石材の劣化や石垣の孕みなどが目立つようになってきました。平成17年には、石垣修復の専門家から崩落の危険性が改めて指摘され、唐津市では約3年をかけて総合的な調査を実施することとなりました。またそれと並行して専門委員会を立ち上げ、土木や石垣修復など様々な視点から、修復の方向性や方法についての検討を重ねてきました。

その成果を受けて、平成20年度から石垣再築整備事業が始まりました。まず15面調査区(15面上段・下段石垣とその掘削予定範囲)を対象に平成20年10月から事前の発掘調査を、平成21年3月から6月まで15面上段・下段石垣の解体を行い、今後の石垣修復に必要な仮設作業道を設置しました。平成21年10月からは1面調査区(1～3面石垣とその掘削予定範囲)の発掘調査に着手し、平成22年4月から石垣の解体工事を行っています。さらに平成22年5月から9面調査区(9面石垣とその掘削予定範囲)で発掘調査を行い、引き続き平成22年11月から石垣の解体工事を行っています。



唐津城絵図(江戸時代中期)唐津城天守閣に展示中

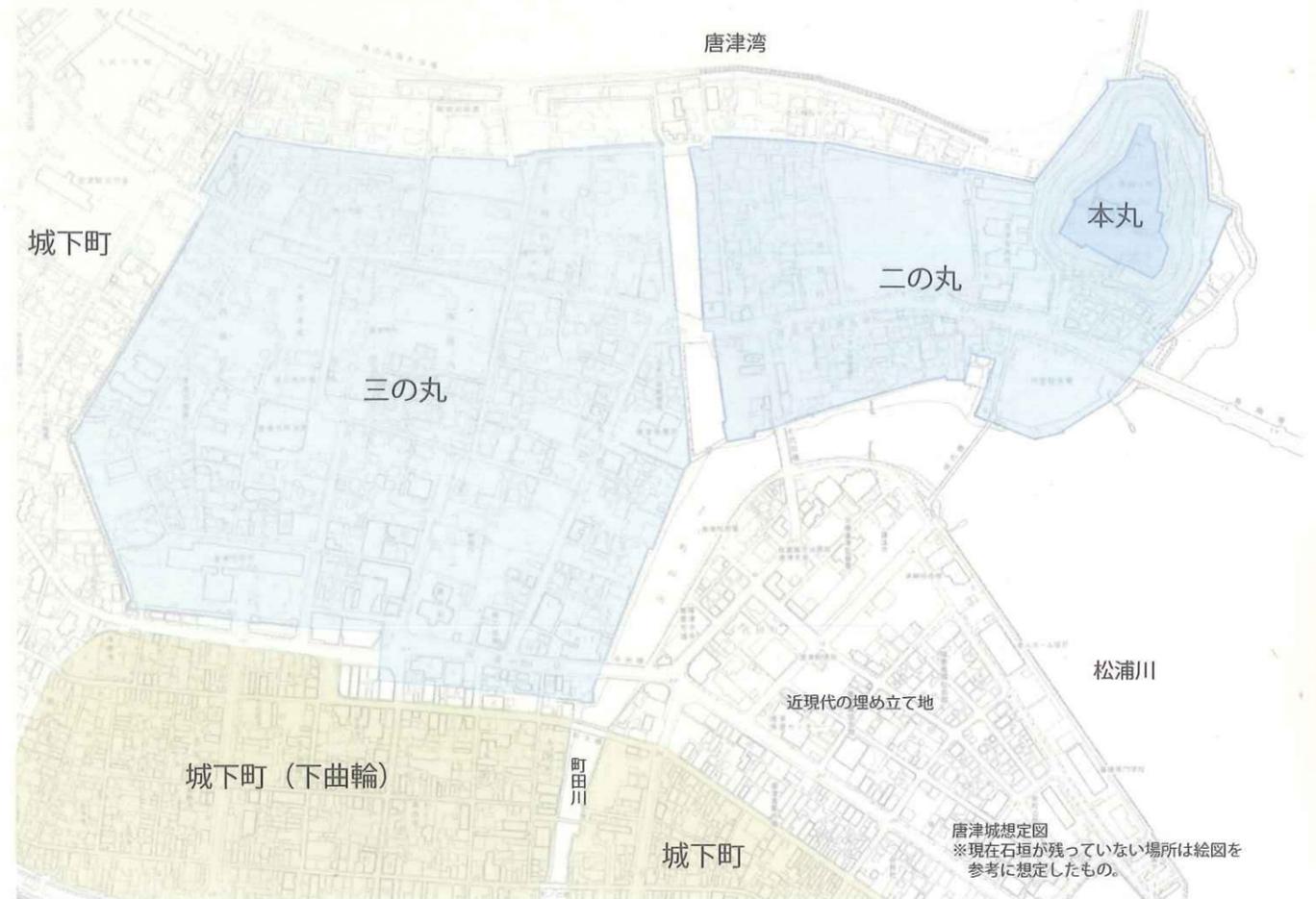
○唐津城の概要○

唐津城は、寺沢志摩守広高により、慶長七年(1602)から慶長十三年(1608)に築城されたと伝えられています。その形は、唐津湾を臨む満島山を本丸とし、南西に広がる砂丘上に二の丸、三の丸を配置したもので、三の丸の周囲には城下町が造られました。満島山を中心に、虹の松原と西の浜一帯の松原が弧を描いて東西に広がっている姿から、舞鶴城とも呼ばれています。

寺沢広高は、唐津城築城に並行して、松浦川の改修・虹の松原の植林・新田開発を行い、現代に通じる近世唐津の基礎を造りました。また、天草の富岡城築城をはじめ、近年では唐津市厳木町にある獅子城も大改修を行っていたことが明らかになり、地域の拠点づくりにも尽力しました。このころ寺沢氏は12万3千石を領する外様大名へと成長していきましました。しかし、寛永十四年(1637)に起きた島原の乱の責任をとり、天草郡4万石が没収されました。さらに、嗣子がいなかった寺沢堅高が正保四年(1647)に自害すると、寺沢家は断絶、改易となり、一時唐津藩は天領となりました。

その後、譜代大名の大久保、松平、土井、水野、小笠原と五つもの家が転封を繰り返しています。唐津藩は、長崎警護を担当した佐賀藩と福岡藩の目付役として重要な任務があり、これらの外様大名を監視する譜代大名がこれにあたったようです。

その後明治維新を迎え、明治四年(1871)の廃藩置県により、唐津藩はその歴史に幕を閉じるのです。明治十年(1877)には舞鶴公園として整備、昭和四十一年(1966)に模擬天守が建設されて現在に至っています。



唐津城想定図 ※現在石垣が残っていない場所は絵図を参考に想定したもの。

唐津城関連の主な出来事

- 1591(天正19年) 肥前名護屋城築城開始。
- 1592(文禄元年) 肥前名護屋城完成。文禄の役開戦。
- 1593(文禄2年) 文禄の役終戦。波多三河守親、改易。
- 1595(文禄4年) 寺沢広高、唐津に入封。
- 1597(慶長2年) 慶長の役開戦。
- 1598(慶長3年) 豊臣秀吉死去。慶長の役終戦。
- 1600(慶長5年) 関ヶ原の戦い。
- 1602(慶長7年) 唐津城築城開始。
- 1603(慶長8年) 江戸幕府が開かれる。
- 1608(慶長13年) 唐津城完成。
- 1615(慶長20年) 大坂夏の陣。
- 1637(寛永14年) 島原の乱勃発。
- 1647(正保4年) 寺沢堅高自害。寺沢家断絶、改易。
- 1648(慶安元年) 一時天領となる。
- 1649(慶安2年) 大久保忠職、播磨明石藩より入封。
- 1678(延宝6年) 大久保忠朝、下総佐倉藩へ転封、松平乗久、下総佐倉藩より入封。
- 1691(元禄4年) 松平乗久、志摩鳥羽藩へ転封、土井利益、志摩鳥羽藩より入封。
- 1762(宝暦12年) 土井利里、下総古河藩へ転封、水野忠臣、三河岡崎藩より入封。
- 1771(明和8年) 虹の松原一揆。
- 1817(文化14年) 水野忠邦、遠江浜松藩へ転封、小笠原長昌、陸奥棚倉藩より入封。
- 1867(慶応3年) 大政奉還。
- 1869(明治2年) 版籍奉還。小笠原長国、藩知事となる。
- 1871(明治4年) 廃藩置県。小笠原長国、免官。幕藩体制の崩壊、唐津城廃城。
- 1873(明治6年) 廃城令。唐津城破却か。
- 1877(明治10年) 舞鶴公園として整備。
- 1966(昭和41年) 本丸天守台に模擬天守建設。
- 1989(平成元年) 三の丸(市役所前)の肥後堀整備。
- 1992(平成4年) 二の丸に時の太鼓建設。
- 1993(平成5年) 三の丸に辰巳櫓建設。
- 2008(平成20年) 唐津城石垣再築整備事業開始。

1面調査区 (1～3面石垣)

○1～3面石垣と1面調査区

1面石垣は本丸の北西に南北にのびる石垣です。石垣の中ほどで、不明瞭な石垣の折れ目（シノギ角）があり、南端で鈍角に折れて2面石垣へとつながっています。さらに2面石垣の南端で直角に折れ曲がり、3面石垣へと続いています。

1面石垣の下には、幅約2mの犬走り（通路）があり、犬走りの下には1面石垣と平行に延びるもう一段の石垣が続いています。下の石垣は急傾斜上に築かれており、築城の際は難工事であったと考えられます。

これらの石垣は、孕みや石材の割れにより劣化しており、特に1面南側と2面石垣では大きく膨れ出ていました。

これらの石垣を解体し積み直すために、2・3面石垣の上に建てられていた収蔵庫を解体し、石垣を解体するために必要な範囲で発掘調査を行いました。また、石垣解体工事に着手してからも、並行して文化財調査を行い、石垣裏の栗石層や盛土の中から出てくる遺構や遺物を調査しています。

このような調査により、重要な遺構や遺物を確認し、江戸時代の唐津城の様子が明らかになってきました。

やぐらだい 櫓台

2・3面石垣の内側から、新たに石垣を検出しました。この石垣は2・3面石垣と平行になるよう並んでいます。新たに見つかった石垣と2・3面石垣で囲まれた範囲は、南北9.5m、東西7.5mの長方形になっています。江戸時代にはこれらの石垣が櫓台となり、この上に櫓が建てられていました。その様子は江戸時代の絵図にも描かれています。もともとは石垣を用いて周囲よりも高くなるように造られていたようですが、石垣の最も下の石材（根石）しか残っていません。明治初期の廃城時または、公園化する際に、石垣石材の大半が取り外されたようです。櫓台全域で石垣の下がすべて入れ替わっていることから、築城後に数回にわたる改修を経て現在の形になったようです。



櫓台の様子（北東から）

せきりい 石塁

1面石垣面から1.2～1.8m内側から、1面石垣と平行に、背を向ける様に並んだ石垣が見つかりました。これにより、石垣の際を一段高くする石塁が本丸の西側全域に広がっていたことが明らかになりました。

石塁内面の石垣は、北側・中央・南側で石材の大きさや加工の度合い、積み方が異なります。北側では、控えが短いためやや扁平に見える自然石を用いています。ほぼ同じ大きさの石材なので、石材間の目地を整えようとしたようです。中央でも自然石を用いていますが、石材の大小の差が激しく乱積みで仕上げられています。南側では、ほぼ同じ大きさに割った割石を用いているため、横方向に目地が通っています。

この変化と対応するように、石塁幅も変化していることから、数回にわたり石垣が積みかえられたと考えられます。



石塁の様子（東から）



1面調査区遺構平面図 (S=1/100)

- 石段
- 石垣石材（自然石：乱積）
- 石垣石材（割石：布積）
- 石垣石材（自然石：布積崩し）
- 石垣石材（自然石：乱積、旧石垣）
- 石塁2段目石材（割石：布積）
- 石塁2段目石材（自然石：乱積）
- 109号柱穴列（控柱跡）

みぞういこう 溝状遺構

現代盛土の直下から、石を溝状に並べて造った溝状遺構を確認しました。土層の状況から、江戸時代の終わりから明治の初め頃に造られたと考えられ、周辺には建物の礎石らしき石材も見られます。



溝状遺構（東から）

きゅういしがき 旧石垣

調査区北側の104号石段や石塁より下層から新たに石垣を検出しました。この旧石垣は、1面石垣から約3m内側に、南北約3mの範囲で背中合わせになる様に、ほぼ平行に延びています。石垣の最も下の石である根石しか残っておらず、上に積み重ねていた石材は取り外されたようです。

1面調査区の南側では、造成土（石垣の裏に入れられた盛土）が数回入れ替えられており、元々の土ではなく砂や石混じりの土が広がっています。これに対し、調査区に北側には築城当時の造成土がみられ、この造成土の上に旧石垣が据えられています。つまり、唐津城築城当初は、今回の調査で確認した石塁はなく、1面石垣と旧石垣により櫓や塀等の建物が造られていたと考えられます。江戸時代に、この旧石垣を大きく破壊し、土を被せてその上にまったく異なる形状の石塁に造り替えたようです。

このように、唐津城本丸では江戸時代に石垣を積みなおす程の補修や改修が数回にわたり行われたことが明らかになりました。さらに、この旧石垣こそが唐津藩初代の寺沢氏が最初に築いた石垣と考えられます。旧石垣の発見は、謎が多い唐津城築城期の様子を知らするための重要な手がかりと言えるでしょう。



検出した旧石垣（南から）



旧石垣南側〔左〕と北側〔右〕（南東から）

いしだん 石段

石段は4ヶ所で確認しました。これらの石段は、一段高い石塁へ上がるための階段です。北から、104～107号石段と呼んでいます。

4つの石段は、その石材の大きさ、加工の度合い、段数、積み方が異なります。さらに、石段が置かれた土層の面も違うことから、造られた時期が異なるようです。石塁・1面石垣は、場所によって積み替えられていることから、石段もこの積み替えにより造りかえられたのでしよう。



107号石段（南西から）

ちゅうけつれつ ひかえばしらあと 柱穴列（控柱跡）

石塁内面の石垣より下から、柱の穴を7つ確認しました。北から、109-1～109-7と呼んでいます。それぞれ1～2mの不整形で、石塁に沿って3m間隔で並んでいます。これらの柱穴は、石垣の際に建てられた塀を後ろから支える控柱の跡と考えられます。柱を抜く時に、柱の周辺を掘り返したため、北側の109-1と109-2ではつながってしまうほどに形が乱れています。109-6では、柱の周囲を掘る前に引き抜くことが出来たようで、柱を抜いた時の丸い形がそのまま残っていました。

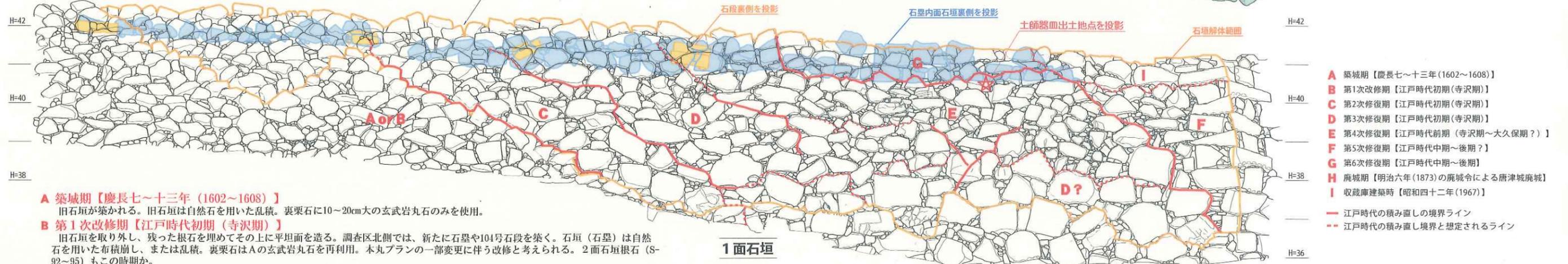
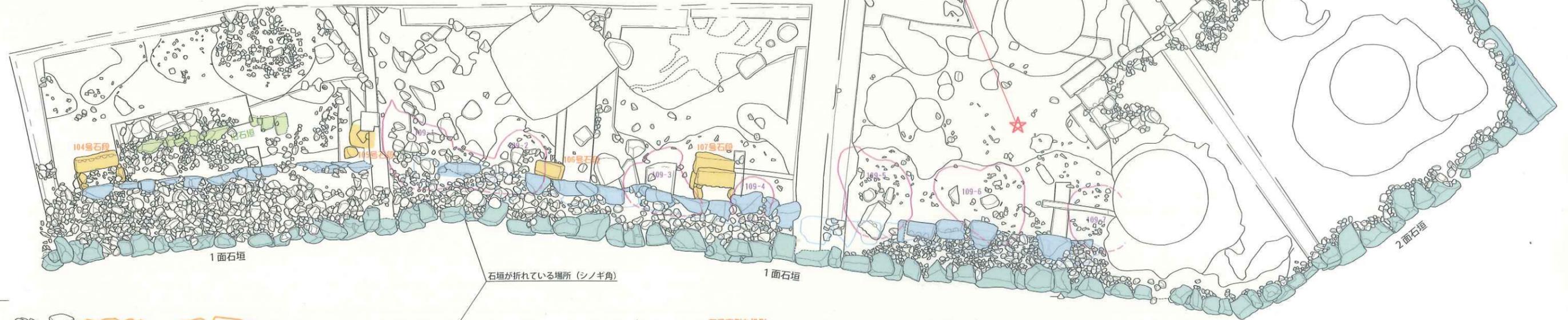


柱穴列完掘状況（北から）

1面調査区 (1～3面石垣)

○度重なる石垣修復

石垣解体を行った1～3面石垣では、石垣の積み方や裏の栗石の状況、さらに内側にある盛土の状況を調査し、江戸時代に行われた石垣修復の状況が明らかになりました。



A 築城期【慶長七～十三年(1602～1608)】

旧石垣が築かれる。旧石垣は自然石を用いた乱積。裏栗石に10～20cm大の玄武岩丸石のみを使用。

B 第1次改修期【江戸時代初期(寺沢期)】

旧石垣を取り外し、残った根石を埋めてその上に平坦面を造る。調査区北側では、新たに石塁や104号石段を築く。石垣(石塁)は自然石を用いた布積崩し、または乱積。裏栗石はAの玄武岩丸石を再利用。本丸プランの一部変更に伴う改修と考えられる。2面石垣根石(S-92～95)もこの時期か。

C 第2次修復期【江戸時代初期(寺沢期)】

105号石段付近から南側にかけて、1面石垣の根石付近まで崩壊。自然石を用いて積み直し、裏栗石は玄武岩丸石を再利用しつつ、一部不足分を花崗岩角礫で補う。盛土は8層(版築状に堆積する砂質土)が対応。修復時に石塁を据え直し(石塁内面石垣の軸がやや折れている)、105号石段を設けている。

D 第3次修復期【江戸時代初期(寺沢期)】

1面石垣のシノギ角以南が根石付近またはそれより下の地盤ごと崩壊。自然石を用いて積み直し、裏栗石は10～20cm大の花崗岩角礫を中心に、玄武岩丸石を2～3割程度含む。築石程の石材が不規則に混入する。盛土は砂層が対応し、備前插鉢や京都系土師器皿、瓦片等、16世紀末～17世紀前期の遺物が出土。修復時には石塁を据え直し、106号石段を設けている。2面石垣では、根石(S-92～95)を残し、これより上の石材が崩壊したのがこの時期、または前のCか。

E 第4次修復期【江戸時代前期(寺沢期～大久保期?)】

107号石段より南側の石垣を修復。築石は50～70cm程度の比較的小さい自然石と粗割石を用いて積み直ししている。数種の栗石が塊として確認できることから、更に細分される(時期差が生じる)可能性がある。

F 第5次修復期【江戸時代中期～後期?】

1面石垣と2面石垣の隅角部付近。角石は算木積みのように互い違いに積む意図は汲み取れるが、石材の選び方や積み方、稜線の通し方に安定感を見出せない。裏栗石は10cm以下の小さな花崗岩角礫と玄武岩丸石をほぼ同量用い、さらに目潰しとして小粒の礫を含む。また、石塁南側の内面石垣は、橋台内面石垣と同質の花崗岩を用いて同じ積み方(布積み)で築いていることから、同時期に修復されたものと思われる。

G 第6次修復期【江戸時代中期～後期】

2面石垣と3面石垣の隅角部付近。橋台の角石に控えが長い加工石を用いるものの、根石付近(S-57・S-75)が算木積みになっていない。裏栗石は10～20cm大の花崗岩角礫と玄武岩丸石をほぼ同量用い、さらに目潰しとして小粒の礫を含む。また、石塁南側の内面石垣は、橋台内面石垣と同質の花崗岩を用いて同じ積み方(布積み)で築いていることから、同時期に修復されたものと思われる。

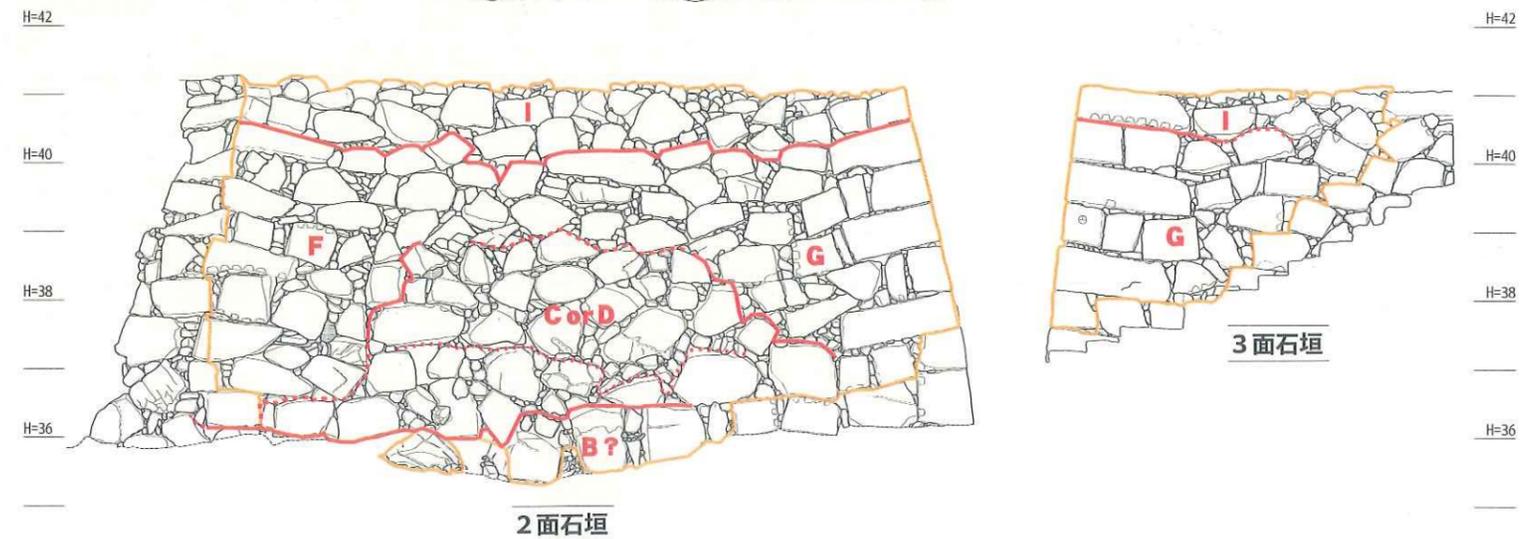
H 廃城期【明治六年(1873)の廃城令による唐津城廃城】

石垣に廃城時の痕跡を見出すことはできないが、発掘調査によりこの時期に廃棄された瓦堆積層を確認したことから、櫓や塀はすべて解体された様子が見える。明治以降、公園化が進む中で天端石が失われ、石塁や橋台は根石付近を残して取り外され、埋もれていく。

I 収蔵庫建築時【昭和四十二年(1967)】

1面石垣南端から3面石垣の天端付近。

1面石垣



2面石垣

3面石垣

1 面調査区

(2面石垣)



石組溝検出状況（南から）



石組溝検出状況（北から）



石組溝と解体された2面石垣（南西から）



石組溝検出状況（北西から）

○石組溝の様子

2面石垣の裾まわりでは石垣に沿って造られた石組みの側溝が見つかりました。残存延長11.09m、溝の内幅30cm、溝の深さ18cmです。元々は、石組溝の北に排水するよう約8°の勾配がつけられています。水平に据えられた底石と、底石の両端に立てられた側石からなり、各石材はホゾ組みによりつなぎ合わされています。

底石石材は12石あり、幅60～66cm、長さ65～122cmです。各石材上面（溝の底面）には、南から北へ各石材に「一」から「十二」の漢数字を線刻しています。側石石材は、東側（石垣側）に9石（長さ80～138cm）、西側に6石（長さ74～105cm）で、南側の側石は後世に取り外されてしまったようです。底石同様、内面に漢数字等を線刻しています。このことから、別の場所で加工された溝石材を現場であわせるための目印として、番号が付けられたと考えられます。

また、石組溝を据える時に、石垣に沿っての地面を掘り込んでいます。掘り込んだ後に底石を据え、側石をはめ込んだようです。水が下に抜けないように、根切りした地面と石組溝の間や各石材の目地には粘土が詰められています。粘土を詰め込み、溝のかたちが出来た後にも、側石上端3cm程、ちょうど地面から側石上端が見える部分をさらに丁寧に加工しています。



石組溝に刻まれた漢数字
上から、「四」、「六」、
「九」が刻まれている。

○石垣の崩壊や変形を物語る石組溝

この石組溝は、本来8°の勾配をつけて真っ直ぐに据えられていたはずですが、検出した石組溝の側石は西側に倒れ、底石は波打つように変形した状態で見つかりました。

江戸時代の石垣積み直しの状況と合わせて見てみると、

- ①江戸時代初期に石垣崩壊、
- ②2面石垣を築く、
- ③江戸時代初期に、2面石垣中央の根石4石（S92～95）だけを残して石垣崩壊、
- ④動いた根石をそのまま栗石で埋めて、石垣積み直し、
- ⑤石組溝設置。（江戸時代前～中期頃か）
- ⑥度重なる石垣崩壊と修復。
- ⑦石垣の孕みにより石垣から押され、側石が倒れ、石組溝中央付近の底石が斜め下に落ち込む。また、石垣左側根石付近の地盤沈下が生じる。
- ⑧側石が倒れ、底石にずれが生じたため、石組溝廃絶。
- ⑨石組溝南側の側石が抜き取られる。（明治以降か）

このように、石垣の崩壊や変形の影響を受けた為、波打つような形となって、その様子を今に伝えています。



石組溝変形の様子【上・下】（北から）

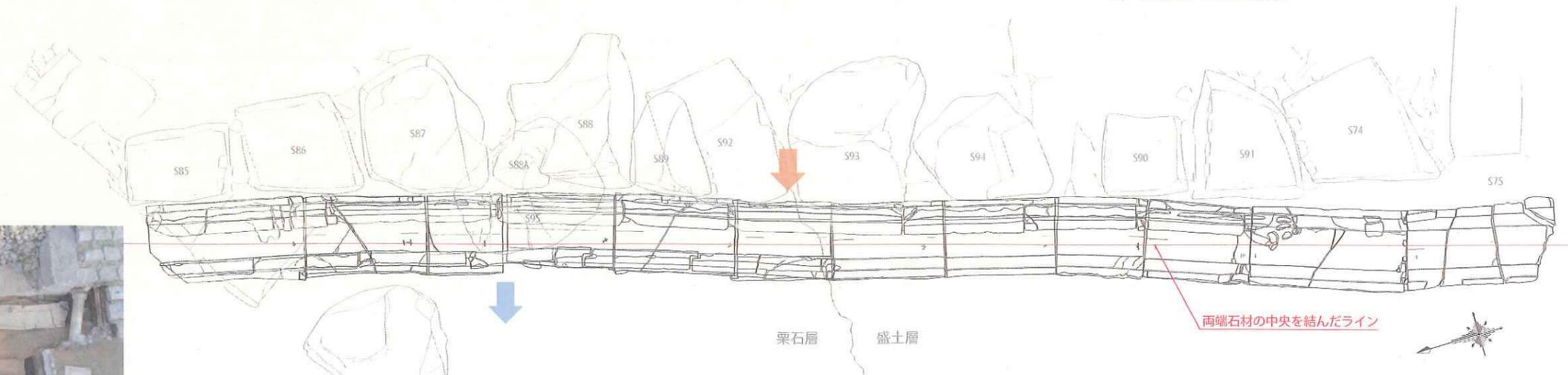
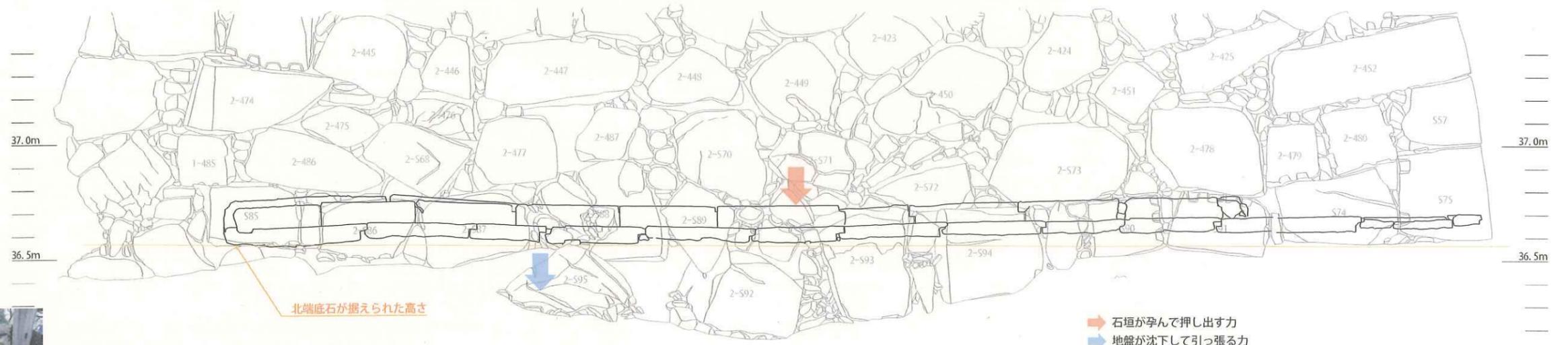


図 2面石垣下石組溝立面図【上】と平面図【下】（S=1/40）

1面調査区 (1面石垣裏)

○地鎮の痕跡を発見

1面石垣の裏の盛土層から、土師器と呼ばれる素焼きの皿が2枚出土しました。2枚の土師器皿は合わせ口にした状態で、水平になる様に置かれていました。出土地点は江戸時代初期に発生した3回目の石垣崩壊を修復するための盛土層（砂層）上部にあたります。上からの掘り込みがみられないことから、盛土の最終工程で合わせ口の状態で据えられ、更に20cm程盛土を行ったようです。

皿の内面には、墨でまじないの文字や記号が書かれています。上皿は、見込みに方形の枠を描き、その内側に「水」の文字を11個書いています。さらに方形の枠の上に「器」、下に「相生」、左に「☆」、右に「𠄎」を配置しています。下皿も同じ内容ですが、「水」の数が13個で、「☆」と「相生」の場所が入れ替わっています。2枚の墨書で筆跡が異なっているようです。

当時の土師器皿は「かわらけ」と呼ばれ、油を入れて灯りを燈したり、宴の盃や食器とした他、まじないや儀礼の重要な道具として使われました。

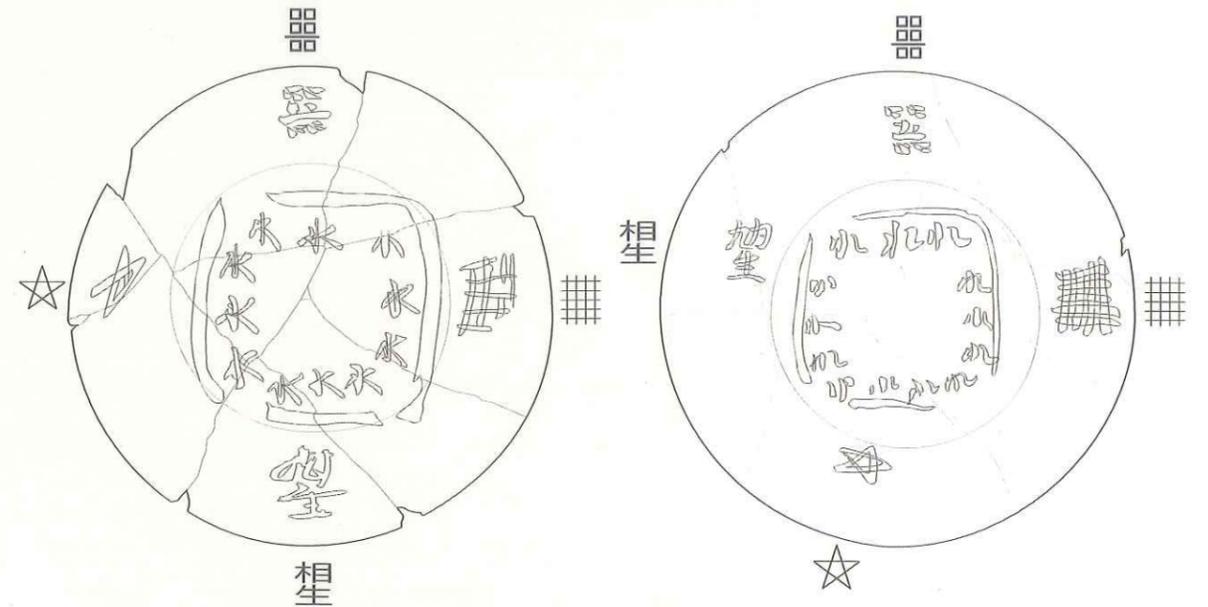
今回出土した土師器皿を見てみると、2枚共に口径が12.7cm程で、製作技術や形状が地元産のものとは全く違っており、当時の精神文化の中心であった京都から取り寄せたもののようです。土師器皿の年代は17世紀の初め頃と考えられ、唐津城が築城された後、寺沢志摩守広高または息子の堅高の頃に当たります。

こうした状況から、2枚の土師器皿は江戸時代初期に発生した3回目の石垣崩壊後、石垣を修復する時に行われた地鎮の痕跡と考えられます。土師器皿を京都から持ち込んで、まじないの作法にのっとり地鎮が行われています。唐津城築城から間もなく石垣崩壊が続いた唐津城本丸の状況と、今回出土した土師器皿の墨書の内容から、本丸石垣をより堅固にしたいという意図がうかがえます。

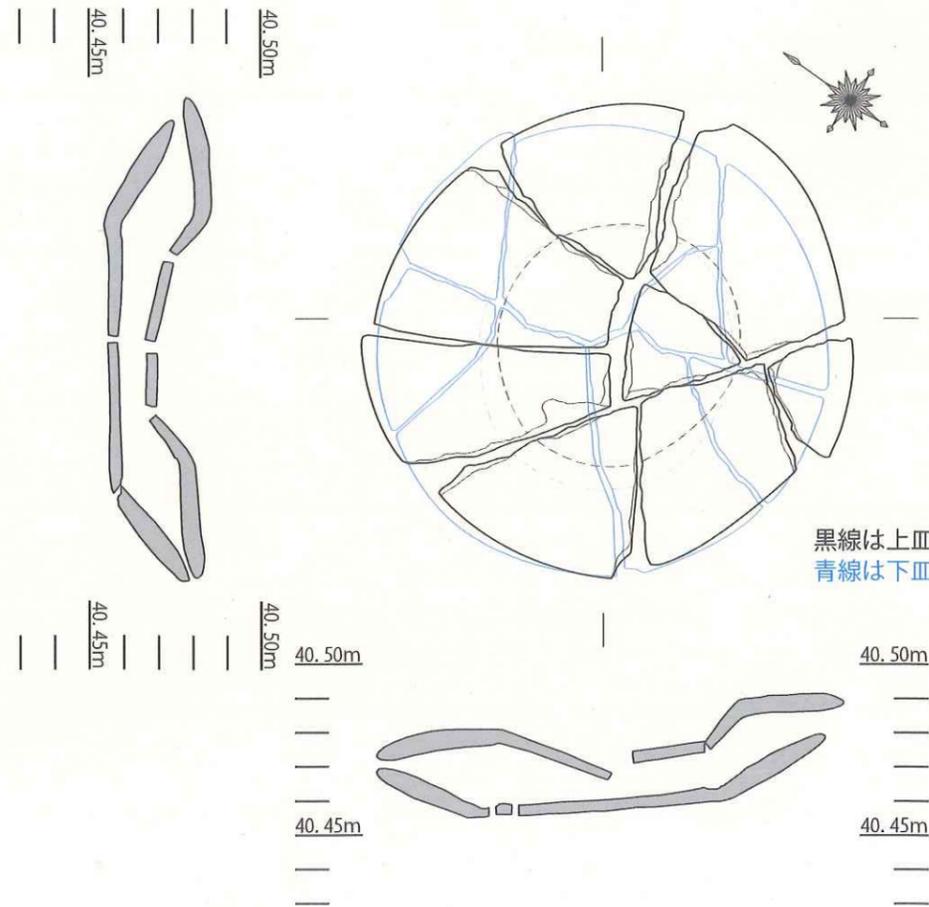
このように、まじないの作法にのっとり文字や記号を記した土師器皿を埋めた地鎮の痕跡は、県内で初めて確認されました。



土師器皿出土状況（左：南西から、右：南から）



土師器皿内面墨書 赤外線写真トレース図【左：上皿、右：下皿】（縮尺不同）



唐津城跡本丸出土土師器皿【祭祀遺物：地鎮】の出土状況（S=1/2）

土師器皿に書かれた記号



「^{やがた}屋堅めの札」。家を建てたり家中に悪い事が起こった時に納められる。火災除けとして用いられ、水を護る意味もある。



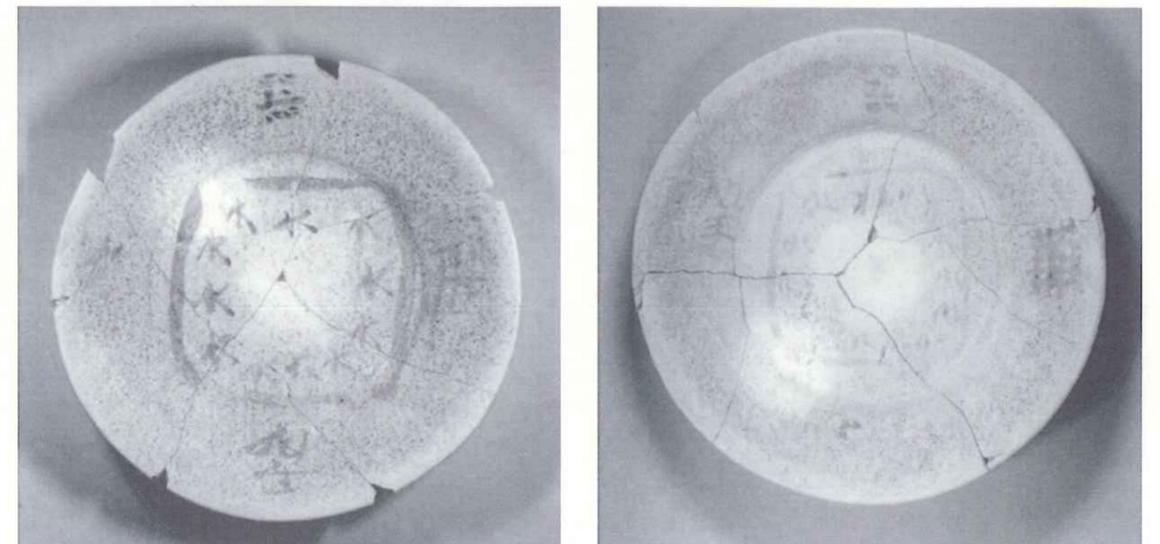
相生。陰陽五行説において、木・火・土・金・水の順に相手を強める影響をもたらす関係を表したものの。



臨・兵・闘・者・皆・陣・裂・在・前の9文字からなる呪文「九字」を唱える際の陰陽道における所作「四縦五横」を表したものの。



五芒星。五行。陰陽五行説において、木・火・土・金・水の相克の関係を表したものの。陰陽師安倍清明が用いた紋で、「清明九字」とも呼ばれる。



土師器皿内面墨書赤外線写真【左：上皿、右：下皿】（撮影協力：長崎県埋蔵文化財センター）

9面調査区 (9面石垣)

○9面石垣の状況

9面石垣は本丸の南側で東西に延びる石垣です。石垣の西側は天守台石垣へとつながり、東側は櫓門へと続いています。1～3面石垣は自然石を多く使用していましたが、9面石垣の石垣石材にはすべて割石を用いています。

9面石垣は、平成22年11月から石垣解体工事に着手しており、現在も継続して解体を進めています。



9面石垣解体の様子（西から）
9面石垣内部の様子。石垣石材の裏に栗石、更にその裏に砂の盛土が堆積している。



9面石垣解体状況【左から解体前、3段目、8段目、14段目】
解体が進むにつれ、栗石の範囲や大きさが変化してきている。盛土との境界にあたる栗石は列状に並べている。

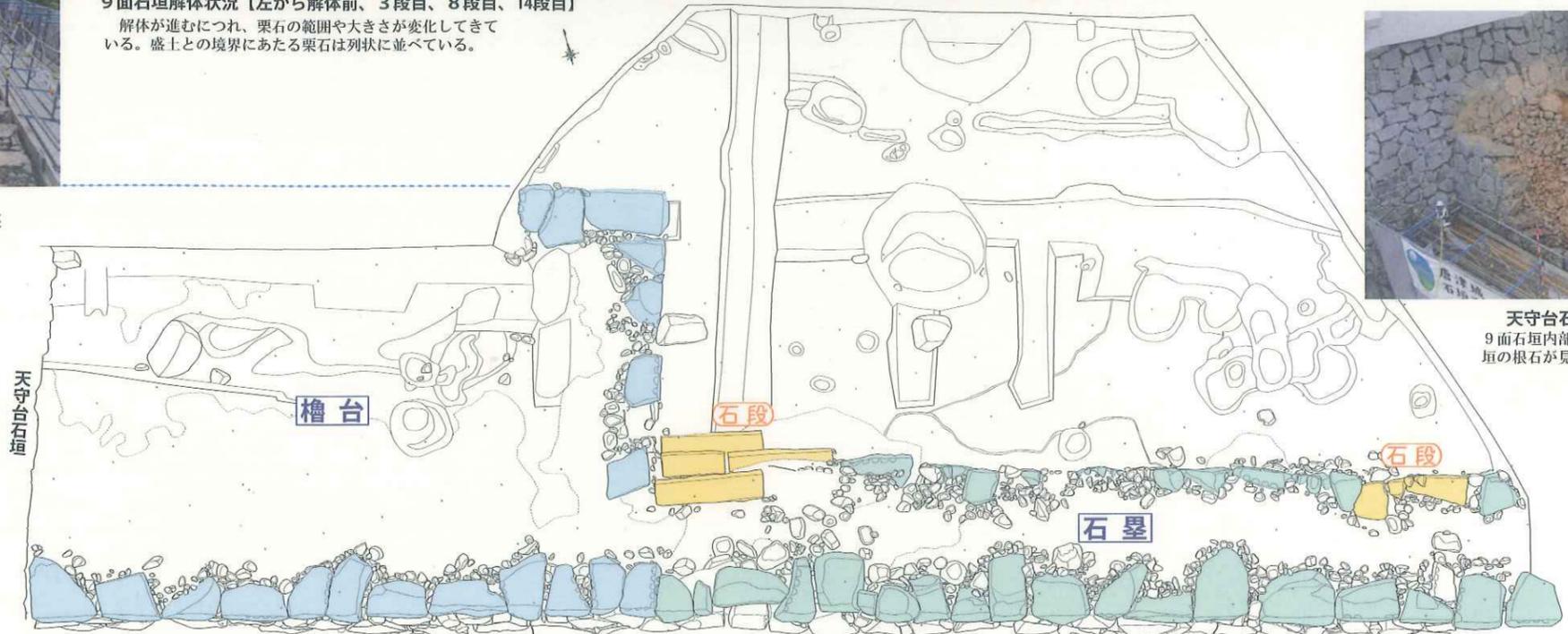
○発掘調査で検出した遺構

石垣解体工事前に行った発掘調査では、様々な遺構を確認しています。

石塁 9面石垣より約2.5m内側から、9面石垣と背中合わせになる様に平行に並んだ石塁の石垣が見つかりました。石塁の幅は約2.5mで、1面石垣の石塁より幅が広がっています。

櫓台（付櫓） 天守台石垣に接するように造られた櫓台の石垣が見つかりました。石垣で囲まれた範囲は南北6.8m、東西10.2mの長方形になっています。天守台に接することから、天守台の付櫓と考えられます。櫓台石垣の最も下の石材しか残っておらず、上の石材のほとんどは取り外されてしまったようです。

石段 石塁西側の延長線上、櫓台との接合部分で、3段の石段を検出しました。長さ180cmと90cmの石材を交互に組み合わせています。この石段の下に陥没により空洞化した穴ができてしまったため、石段が傾いた状態で見つかりました。また、調査区東端の石塁上でも石段を一段確認しました。上面は平坦に整えています、3段の石段ほど細かく加工されていません。



天守台石垣と9面石垣
9面石垣内部では、天守台石垣の根石が見えている。



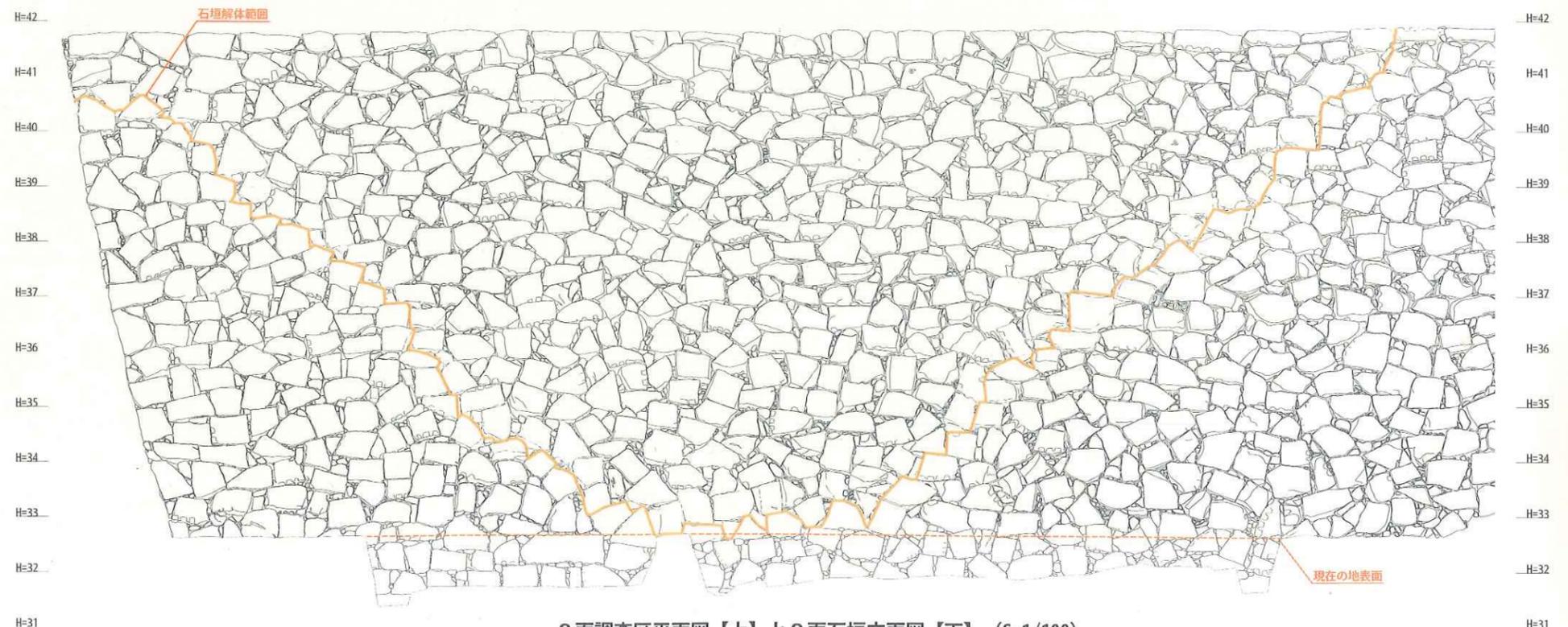
櫓台（付櫓）の様子（北東から）



石段（3段）の様子（北から）



石段（1段）の様子（北から）



9面調査区平面図【上】と9面石垣立面図【下】 (S=1/100)